

大東ふれふれ帳

(14)

菊薫る季節

大東市農業研究クラブ連絡協議会が市に代わり菊花展を開いて、早くも第二十三回目を迎え、来る十月三十日から十一月四日まで市民会館前庭で行われる。

菊が市の花に制定されたのは市制十五周年の昭和四十六年十月であるが、それ以前より菊花展は開催されていた。

菊はキク科の多年草で、原産は中国大陸といわれ周代に記録があり、宋代にはすでに今日の中菊程度の美しいものが描かれ「菊譜」には品種名もみられる。

我が国には奈良時代以後桓武天皇延暦十六年(七九七年)以前に中国より渡来したといわれ古くから觀賞用に栽培されていた。

明治二年 皇室の紋章に

「キク」が正式に定められ天皇家は十六花弁八重、皇族は十四花弁ギクである。河内国に、ゆかりのある楠木家の紋章は菊水である。

多くの人は玄関・机上に切り花を飾ることはあっても自ら育てることは少ない。極めて合理化された文藝的生活が菊づくりのさいご味を奪ったとすればそれは悲しい。

昭和六十五年にはお隣りの鶴見緑地(大阪市鶴見区)で「花の万博」が開催される。

花の見世物では物足りない。人に花を育てさせることを、まず教えるべきである。そのためにも菊花展の意義は大きいと思う。

野崎の山がほのかに霞んでくる春まだ浅き日、山の斜面または谷間で腐蝕土を取っている人に出会った。菊づくりの土を物色しているのだ。菊づくりは土づくりにつきるといってほど土を選ぶのは大切である。

都市化した我が町では腐蝕土をつくる土地すらない家庭が大半である。

菊づくりは子供を育てると大差がないほど、手間暇がかかる。それでも育てたい、作りたい。

ある夏の日、一天にわかにかきくもり、今にも夕立が来そうになった。田んぼから急いで帰り菊を軒下へ入れる。強い雨は葉を傷めるし、水のやりすぎにもなる。花は水で映かすものといわれるぐらい大事であるが、水道水を直接やることも

も禁物である。

くみおきの水を午前中にやるように心がけ、午後(夕方)に水やりをすると伸びすぎるので注意を要する。

九月上旬までの柳芽はまともな花にはならないのでわき芽を伸ばし主枝にする。茎・葉にまんべんなく日光が当たるように鉢を二、三日ごとに少しずつ回す。見てよし、作ってなおよし。

花をいつくしむと、生命の美しさが実感できる。花を育てることは人間(自分)を知る近道でもある。

市民の皆さんが出品されることを望み、にぎにぎしい菊花展にしたいと願っている。

あかりつけ
菊の手入れや
虫のこえ
文・橋本実



大菊、小菊など市民からの作品でいっぱい
(昨年の菊花展)